

## 第1章 Overhearer が志向に埋め込まれた対面的相互行為 ～ラジオ番組における子ども科学電話相談～

宇都麻衣子

### 0. はじめに

テレビやラジオ、新聞にインターネットなど、様々なメディアが存在する。とりわけ、テレビやラジオで放送されているものは、一見日常と何ら変わらないやりとりのように思える。例えばバラエティ番組であれば、その場の参加者たちは好き勝手に話をしているようにも見えるだろう。しかし、実はそうではない。

メディアをメディアとして成り立たせるには、そこに必要不可欠な存在がある。視聴者——つまり、その場には直接参加はしていないが、その場で行なわれているやりとりを聞いている存在、オーバーヒアラー<sup>1</sup>である。もし公共の電波でこのオーバーヒアラーの存在を無視し、場の参加者だけに通じる会話を一方的に行なえばどうなるだろう。視聴者はそんなやりとりに興味が生まれず、番組を変えてしまうかもしれない。また、視聴率の取れない番組の援助を行なうスポンサーも援助をやめてしまうかもしれない。

このように、メディア、とりわけテレビやラジオというものは、何ら造作ない日常の切り出しのようでありながら、実は視聴者、つまりオーバーヒアラーを大変意識し、緻密に構成されているのである。

しかし、それが実際にメディアにおいて、どのように表れているのだろうか。本稿の関心はそこにある。よって、本稿では「いかにメディアにおいてオーバーヒアラーが志向されているのか」ということを目的に、論を進めていきたい。

### 1. 調査概要

いかにメディアにおいてオーバーヒアラーが志向されているのか、という点に対し、今回は「夏休み子ども科学電話相談」というラジオ番組を取り扱いたい。

このオーバーヒアラーが志向された対面的相互行為分析において、まず最も注意したいのが、「生放送であること」である。なぜ「生放送」を重視するのか。その理由は、いかにその場においてオーバーヒアラーが志向されているのかを知るためには、その場面における参加者の振舞いが大変重要なものとなってくるからである。通常の番組のように、あらかじめ録音されたものを編集して流したものでは、その空間における参加者の振舞いがいかにオーバーヒアラーを志向し、対面的相互行為研究を達成しているのかを、正確に分析できない可能性がある。そのような点において、この「夏休み子ども科学電話相談」というラジオ番組は大変ふさわしい題材である。

また、この「夏休み子ども科学電話相談」という番組は、リスナーである子どもの相談に、電話を介して答える場面を放送する、というものである。つまり、普段はオーバーヒアラーであるはずのリスナーが、電話を介してメディアに埋め込まれるという点においても、大変面白い分析となるだろう。

それでは、以上を踏まえた上で、調査の対象として扱うラジオ番組「夏休み子供科学電話相談」の概要に入りたい。

番組名	夏休み子ども科学電話相談	
	NHK FM ラジオ第1放送	
ラジオ概要	動・植物、天文・宇宙、科学、心と体の疑問点を全国の小・中学生から募集し（放送前に電話や電子メールで受け付け）、それについて放送時間中に、電話口で専門家の回答者が判りやすく解説しながら回答する。	
録音日時	8月25日（火） 午前9時05分～午前11時55分 8月26日（水） 午前8時38分～午前11時55分 8月27日（木） 午前8時42分～午前11時55分 8月28日（金） 午前8時35分～午前11時55分 8月29日（土） 午前8時35分～午前11時55分 ※電話の受付は、放送当日の朝8時から放送終了の30分前まで。	
録音機材	MDCD ラジオと IC レコーダーをケーブルで接続し、録音したもの。	
出演者	進行役	鎌田正幸
	回答者（動物・魚）	川口幸男・林公義
	回答者（昆虫）	矢島稔・高家博成・佐々木洋
	回答者（天文・宇宙）	永田美絵
	回答者（植物）	藤田智
	回答者（野鳥）	松田道生
	回答者（科学）	高柳雄一
	回答者（心と身体）	篠原菊紀
	回答者（環境）	小出五郎

録音したラジオ番組は、トランスクリプトにおこした上で、会話分析に基づいて検証していく。会話分析とは、「会話のなかでどのように一定の活動が成し遂げられ相互行為が組織されているのかを明らかにする」（西坂, 1999:74）ものであり、このラジオという映像の存在しない音声だけの世界で行なわれる相互行為を研究するに、ふさわしい方法であると思う。

## 2. 夏休み子ども科学電話相談の全体の流れと特徴

### 2-1. 『夏休み子ども科学電話相談』の流れ

それでは初めに、『夏休み子ども科学電話相談』全体の流れをみてみたい。場面に登場するのは、「進行役」であるアナウンサーと、それぞれ専門分野を持つ「回答者」が数名、そして「相談者」である子どもである。

まず子どもが掛けた電話は、最初このラジオ番組を担当するスタッフが取り、簡単な説明および質問（名前や出身地を聞くなど）をした後、進行役に回す、という形だ。よって、このラジオにおける会話開始の合図は「はい、次は、〇〇（県名）のお友達です。もしもし」という進行役が告げるところから始まる。

次に会話が始まると、進行役は名前や学年、質問を聞いてから、回答者に場の主導権が移行する。そこでは相談者の質問内容によって次の発言者が決定され、指名された回答者が答える、という構図が描かれている。基本的に、一回の電話で相談できる内容は一つである。ただし関連した相談のみ 2 つすることもある。また、担当する回答者が答えを言っている間、話すのは当の回答者のみである。進行役や他の回答者は話さない。ただし、時おり進行役や他の回答者が笑ったり、相槌、感嘆を入れたりすることがある。

最後に、相談者が「はい」「わかりました」などで納得した返答をし、進行役がそれで相談に対する説明が終了したと判断すると、再び場の主導権は移り、進行役が握ることとなる。会話終了のやりとり<sup>2</sup>は、相談者と回答者、進行役との間で明確に「さようなら」と言うことはめったになく（時おり進行役や回答者が「バイバーイ」と言うこともあるが）、相談者が「ありがとうございました」と言うことが、その代わりとなっている。また、相談者と回答者の会話が終了後に、進行役が先に行なわれた会話の中から気になった点について質問し、回答者が答えることがある。

### 2-2. 『夏休み子ども科学電話相談』の特徴

先の項ではこの「夏休み子供科学電話相談」の全体的な流れについて述べたが、ここでは私がこのラジオを聴いていて感じた特徴を述べていく。

まずこの番組を聴いていてもっとも思ったことは、進行役のアナウンサーおよび、回答者達は相手が子どもであることを明確に意識して会話をしているという点である。例えば、進行役は新しい相談の導入場面で、子どもを「お友達」と呼んで紹介し、進行役および回答者は、個人を識別する符号として、「〇〇（名前）くん」もしくは「〇〇（名前）ちゃん」と呼びかけている。さらに、進行役および回答者は、できるだけ子どもが理解しやすい言葉や例に置き換えて説明しているし、子どもと話す際には、語尾を伸ばさず、比較的ゆっくりと話すなどしている。

このような行動は、一見なんらおかしくない行為に思える。この番組には先ほども紹介したが「進行役、回答者、相談者」という地位、つまりカテゴリ<sup>3</sup>が存在する。しかしまた同時に、番組名に「夏休み子供科学電話相談」とあるとおり、相談者は「子ども」であ

ると明確に理解することが出来る。そしてそれに対して、番組の進行役を勤めるアナウンサーや相談に答える回答者が「大人」として理解することは、やはり同様に容易であろう。彼らは{進行役、回答者、相談者}という地位カテゴリーにあると同時に、{大人、子ども}という地位カテゴリーでもあるのだ。そうであるならば、呼び方や話し方に特徴が見られても、その対応は適当だと判断されるかもしれない。

もちろんそうであろう。しかし、この場はただのラジオ番組の場ではない。ここはラジオ番組であると同時に、相談場面でもあるのだ。串田は、「平行して利用可能なカテゴリー集合が複数ある場合、参加者たちは参加の連携の配置を維持したまま、カテゴリー化を切り替えることも可能である」(串田, 1999:129)と述べている。

つまり、このように複数カテゴリー集合が並行する場合、その場に参加する者はそれが適当な場面に応じてそれを使い分けられるということだ。そうであるならば、当然ながらこの複数のカテゴリー集合は、番組構成に決して無関係でないし、むしろ積極的に番組を構成する要因となっているはずである。そして私は、ここにラジオ番組としての特徴の一つを見ている。

つまり何が言いたいのかというと、先ほど私が提示した特徴が、一見すると進行役、回答者が大人であり、相談者が子どもであるからそのような会話となるのだと思えなくもない。しかし、この場は大人と子どもの相談場面でありながら、また同時にラジオという公共のものでもあるのだから、進行役であるアナウンサーや回答者達は、そのことを志向してその場その場で自らのカテゴリーを巧みに使い分け、番組を構成しているのではないだろうか。そして、先ほど上記に載せたこのような語り方や呼び方は、子どもに対する配慮であると同時に、そのラジオという公共的な存在を意識した行動のほんの一例ではないか、ということである。

そして、このカテゴリーをいかに場面に応じて使い分けられるのか、ということが、本稿の目的である「オーバーヒアラーを志向した対面的相互行為」に重要なかわりを持っていく。それがどういうことなのかを、以下の節で見ていきたい。

### 3. Overhearer を意識した場面構成

#### 3-1. 「ビジョウ突起」の正体

「夏休み子ども科学電話相談」というラジオ番組が、実は複数のカテゴリーを使い分けて構成されている、という事を述べた。さらに、そのカテゴリーが本稿の目指すところである、「オーバーヒアラーを志向した対面的相互行為」にどう関連してくるのかを、この節で述べていきたい。

なお、以下では実際に「夏休み子ども科学電話相談」においてなされた 1 つの相談場面「ビジョウ突起」の中から、第 1 項で断片 1、第 2 項で断片 2、第 3 項で断片 3 を引用し、分析していく。具体的に断片を見る前に、軽く「ビジョウ突起」の相談場面について触れ

ておく。ここでは、まずこの場面で、相談者Aは「チョウチョの仲間には：アゲハチョウなどは（.）ビジョウ突起が羽の下の方にあるけれど：ないものも（.）あるので：ビジョウ突起の付いている りゆ：うを教えてください」という相談をしている。それに対して、「ビジョウ突起」という語が、アナウンサーおよび回答者Yに馴染みのない単語として振舞われ、ここから、この「ビジョウ突起」という単語の特殊性が窺える。その後、「ビジョウ突起」に対する回答者Yの解説が始まるわけであるが、その過程で、すでに「ビジョウ突起」が虫の口の一部である「下唇」の「髭の一部」が変化したものであることが知らされている。

次に扱う場面は、その「ビジョウ突起」である「下唇」の「髭の一部」に特に変化したチョウの代表的な例として、回答者Yがテングチョウを挙げているところである。この場面が直接、「オーバーヒアラーが志向に埋め込まれた対面的相互行為」の分析になるわけではないが、後で重要となる部分なのでここにも触れておきたい。

#### 〈断片1〉 ビジョウ突起の典型例

日時：2009年08月26日 10時15分42秒～

場面の参与者：アナウンサー、回答者Y（=矢島）、相談者A

- 001 回答者Y でもあなた テングチョウって知ってる？  
002 相談者A テングチョウ？ あ 何か聞いたことがある  
003 回答者Y 聞いたことある あれはチョウチョだからね  
004 相談者A はい  
005 回答者Y テングチョウってのはね： なぜテングチョウって言ったかっていうと  
006 その： 鼻状突起が ダ： と伸びて長いものだから：  
007 相談者A あ：  
008 回答者Y 初めて見た人が 天狗の鼻に見えちゃったんだね [へへへ  
009 相談者A [はい  
010 回答者Y のように見えるっていうことで  
011 相談者A はい  
012 回答者Y それでテングチョウって名前が付いたんですよ：  
013 相談者A （.） は：：

ここでまず注目したいのは、001-012 行目にかけて、回答者Yが「ビジョウ突起」、つまり「下唇」の「髭の一部」が変化した虫の典型例として、テングチョウを例に出しているところである。とりわけ 005-008 行目にかけて、のテングチョウの「テング」とは、下唇の髭の一部が伸びて大きくなったものを、天狗の鼻と間違えたためにつけられたものだと、述べている。ここから、すでにアナウンサーは「びじょうとつき」が「鼻状突起」である

ことに気づいていると推測できる。

また、カテゴリーに関係する部分があるのでここに触れておく。001 行目で回答者Yがした「テングチョウって知ってる?」という発言に対して、相談者Aは次の行で「テングチョウ? あ 何か聞いたことがある」と返している。ここで回答者の問いに対して、まず「テングチョウ?」と繰り返している。この繰り返しは、その語句に聴き覚えがない、もしくは相手の言い間違いを暗に指摘する時などにされる物言いであり、この場合、「テングチョウ」という語が回答者Aに馴染みのない言葉として扱われていることが読み取れる。さらにその後、「あ」という感動詞の後に「何か聞いたことがある」という風に答えていることから、相談者Aが「テングチョウ」という語にあまり馴染みがないという振る舞いが読み取れる。

さらに、012 行目で回答者Yが「それでテングチョウって名前が付いたんですよ:」と言ったことに、013 行目で相談者Aが「は::」と返している。この「は::」とは、001 行目から 012 行目までの回答者Yの教示を受けての返答であり、相槌や納得、感心などを意味する感動詞である。この感動詞は、回答者Aが言うテングチョウについての知識を教授され、新たな知識として受け止めたことを意味している。

ここで言えることは、回答者Yの方が相談者Aよりも知識が多く、自らを教授する立場「専門家」として志向し、相談者Aもまた自らを「素人」と志向して振舞っているということである。ここからのやり取りから、{相談者A：回答者Y＝素人：専門家} のカテゴリーが成り立っていることがわかる。

### 3-2. 相談者Aとの会話終了の達成

先ほど断片1で「ビジョウ突起」が特に変化した例として「テングチョウ」が挙げられ、このチョウの「テング」とは、発達した「ビジョウ突起」が「天狗」の鼻に間違われたために名づけられたのだと回答者Yが発言している。そこから、すでに「ビジョウ突起」が「鼻状突起」であるということが、聞いているアナウンサーに推測されたのではないかと記述した。

次に取り上げる断片2は、すでに相談者Aが相談を終了し、会話の主導権が回答者Yから進行役であるアナウンサーに再び移ろうとしている場面である。この場面で見たいことは、いかに相談者Aと回答者Y、そしてアナウンサーが会話の終了を協同で行っているのかである。少し余談であるようにも思われるが、相談が終了しているというところに注目したいがためであり、それが次の第3項で行なう分析、つまり本稿で本命にも繋がるのである。

〈断片2〉ビジョウ突起の相談終了場面

日時：2009年08月25日 10時11分26秒～

場面の参加者：アナウンサー、回答者Y（＝矢島）、相談者

- 001 回答者Y ね: こうやって口を調べること 口を比べること  
 002 相談者A はい  
 003 回答者Y 分類を知る一番大きな手がかりなんで ぜひ 続けてください  
 004 相談者A はい  
 005 回答者Y は:はい  
 006 アナウンサー はい  
 007 回答者Y わかりました:?  
 008 相談者A はい ありがとうございます  
 009 回答者Y は:はい  
 010 アナウンサー は:はい じゃあ また質問してください  
 011 相談者A はい [ありがとうございます:  
 012 アナウンサー [びじょうと  
 013 アナウンサー はい (.) ビジョウっていうのは

まず、上記の断片 2 を見ただけで、この相談者Aによる相談が終了しているということが読み取ることができる。これ自体は、なんら変わらない、ごく普通に行われている会話終了の際のやりとりである。しかし、その会話が終了するとは実際どういうことなのか。この項で見ていくのは、まさにそのようなことである。

シェグロフとサックスは、会話における順番取得装置<sup>4</sup>に言及した後で、会話の終了とは「発話が完了しうる場所での移行適切性<sup>5</sup>の停止をいかに調整するか」であると述べ、そのための方法として「最終交換」(terminal exchange)を挙げている。この最終交換とは、「さようなら - さようなら」のやりとりのような慣習的な成分から形成されており、発話対偶(utterance pair<sup>1</sup>)、つまり隣接対偶<sup>6</sup>(adjacency pair)が構成成分である。このように、最終交換として機能する隣接対偶の構成成分は「ありがとうございました」など多種存在し、また終了交換だけで使用されるとは限らない。ここで重要なのは、会話の終了とはそのような最終交換の語がどこに配置されるかによって決まる、ということである。また、最終交換となる語を導くためには先終了句(pre-closing)<sup>7</sup>というものが存在し、シェグロフおよびサックス(1974=1989)は、このような先終了句およびその後続く最終交換をまとめて、終了部分と呼んでいる。

要するに、会話とは、会話参加者同士の協同作業であり、その終結は参加者全員の了承のもとで行われるものなのである。例えば 2 人で話しているときに、片方が何の脈絡もなく会話を終わらせたならば、もう片方は相手が何か怒っているのかもしれないと推測するだろう。またある会話の区切りがつき、片方が会話を集結させようとしても、もう片方がそれを拒み新たな話題を展開したならば、会話を終了することはできないだろう。このように、会話を終結するためには「最終的な隣接対の交換を成功に導くために、これからお

互いに新しいトピックの導入は避け、会話の停止を確実にするためのプロセス」(山田, 1999:21)が必要となってくるのだ。そしてそれが、先ほど述べたような先終了句や、最終交換に相当するわけである。

それでは、断片2に当てはめつつ説明していきたい。ここまでの前提として、すでに「ビジョウ突起」が何であるかの説明がなされ、このラジオ番組の主題である相談に対する答えは与えられている。つまり、相談の主要目的はすでに達成されたといってもよい。そのことを踏まえたうえで、まず003行目の発言を見ていく。ここで、回答者Yは相談者に向かって「分類を知る一番大きな手がかりなんで ぜひ 続けてください」と述べている。この「ぜひ 続けてください」とは、この会話が終了した後に、相談者Aがすることに対してのアドバイスである。似たようなアドバイスは、相談中にもたびたび行われており、回答者Yがこの場で再びそれを勧めたのかがここで一つ注目すべき点となってくる。なぜなら、会話中になされた「題材がその会話の終局で用いられるならば、その会話の終了に正当な理由を与えることができ」(シェグロフ・サックス, 1972=1989:210)、回答者Yのような「ぜひ 続けてください」といった言い方になれば、それは終了の正当な理由が宣言されたことになるからである。この宣言が、相談が終了した後という、まさに適切な配置でなされるならば、これは先終了句として機能しているといえる。そしてさらに、続く004行目で相談者Aも「はい」と述べ、これに同意している。この同意は移行適切性の終了の了解であり、相談者Aがもはや新たに話題を繰り返す気がないことを意味している。

先終了句のやり取りに了解なされ、その続く005行目で回答者Yは「はい」と言い、同じく先終了句となりうる語を発している。この先終了句の後に続く先終了句とは、発話の順番が自分にまわってきた時に、もう話すべきことがないことを示すために、先終了句を用いてパスをしているのであり<sup>8</sup>、やはりこの相談者Aに対する回答が終わったことが読み取れる。

しかしここまででは、まだ相談者Aによる相談が完全に終わったとは言い難い。確かに、相談内容に対する答えが与えられ、また003行目で回答者Yにより終了の宣言が為された(「ぜひ 続けてください」)。それに対して相談者Aも同意したわけであるが、これはあくまでも先終了句、つまり先終了となる可能性のある句」(シェグロフ・サックス, 1972=1989:198)にしかすぎないということだ。先ほども書いたとおり、会話の終了とは話者同士が協働で達成するものであり、言い換えれば、終了が行われている間中でも、話者が望めば会話をいつでも再開することができてしまうのだ。

つまり、相談に対する回答を述べた回答者Yおよび進行役であるアナウンサーにとって、いかに会話を終了するかが課題となるわけである。その意味で、004行目の発言からは、相談者Aが再び形式的に不適な返答をしたと読み取ることも可能だ。その直前の003行目で回答者Yは終了の宣言を行ったわけであるから、続く言葉には了承の先終了句と、それに続く最終交換が必要となってくる。しかしここで相談者Aは先終了句(004:「はい」)しか述べなかったために、回答者Yは発言をパスする意味の先終了句を述べることしかできな



かったのである。

さきほど会話の終了は会話参加者による協同の達成課題であると述べた。しかしそのような意味からすると、次にくる 006 行目のアナウンサーの発言は少々異質である。というのも、回答者Yと相談者Aの会話が始まってから、アナウンサーは相槌や笑うことはあっても、基本的に発言としてとれるものは何一つなかった。それも当然である。なぜなら、この相談という場において、アナウンサーは素人であり、答える権利があるのは昆虫の専門家である回答者Yのみであるからだ。この断片 2 の 007 行目において、もはやその過程に入っているとはいえ、まだ場面は相談者Aによる相談が終了していない。それなのに、なぜアナウンサーは発言し、それが違和感なくこちらに読み取ることができるのだろうか。

それは、彼がこの場で「素人」としてのカテゴリーではなく、「進行役」としてのカテゴリーから行動しているためである。進行役というこの空間での責任者にとって、場を円滑に進行していくことは、権利であり義務でもある。そうであるならば、このような会話に入り込む振る舞いは可能となる。

それは果たしてどういうことなのか。私たちは、普段規範が行為を制約するものだと考えがちである。しかし実はそうではない。喫茶店で他人の会話に「静かにしなさい」と注意すればおかしい行為であるが、教師が授業中、生徒に「静かにしなさい」を注意することが正当な行為とされる。このように、人は自らがどのような地位カテゴリーにいるかによって、つまりカテゴリーの有する規範によって行為が可能になっているのである。その意味で、アナウンサーが相談途中で口をはさむことは、「進行役」として振舞うにおいて適切な行為であるといえる。

つまり、時間が限られたラジオという場において、進行役が今円滑に達成すべき課題は会話の終了である。今まで発言をしてこなかった彼が、ここで「はい」という先終了句を述べることによって、場に新たな終了の宣言がなされたと推測することができる。そのため、回答者Yは 007 行目で最終交換を述べることができ、また相談者Aもその了承として「ありがとうございました」と最終交換を交わしているのだ。

続いて 010 行目のアナウンサーの発言「はい じゃあ また質問してください」に、相談者Aは再び回答をしてはいるが、その言葉は「はい ありがとうございました:」であり、アナウンサーの「じゃあ また質問してください」という発言に対しての了承である。そしてそれは、やはり先終了句である「はい」と、そして最終交換と読み取り可能な「ありがとうございました:」と述べているだけである。

これら断片 2 のやり取りは、相談に対する答えが与えられた後での会話である。つまり、すでに本題は話された後だと判断できる。その意味において、上記のように終了部門が配置された箇所が回答者Yと相談者A、そしてアナウンサーによって適切であるように振る舞われ、会話が終了したということが理解可能であると思われる。

### 3-3. アナウンサーによる「ビジョウ突起」への理解表現

ここまでで、「ビジョウ突起」が虫の口の一部である「下唇」の「髭の一部」が変化したものであることが知らされ、とりわけ「ビジョウ突起」が変化した例として「テングチョウ」が挙げられた。またこのチョウの「テング」とは、発達した「ビジョウ突起」が「天狗」の鼻に間違われたために名づけられたのだと回答者Yが発言している。そこから、すでに「ビジョウ突起」が「鼻状突起」であるということが、聞いているアナウンサーに推測されたのではないかと思われる。

また先ほどの断片 2 では、相談者Aとの会話の終了を達成するかという点について、先終了句や最終交換などを用いながら述べてきた。

次は、いよいよ本稿の目的である「オーバーヒアラーが志向に埋め込まれた対面的相互行為」に触れるところを分析していきたい。それでは、いかにそれが達成されているのかを次の断片 3 を見ながら述べていきたい。

〈断片 3〉 ビジョウ突起によるすれ違い

日時：2009年08月26日 10時11分42秒～

場面の参加者：アナウンサー、回答者Y（=矢島）、相談者A

- 001 アナウンサー はい じゃあ また質問してください  
002 相談者A はい [ありがとうございました:  
003 アナウンサー [びじょうと  
004 アナウンサー はい (.) ビジョウっていうのは  
005 回答者Y 要するに  
006 アナウンサー は は [はなじょう ってことですか] ええ  
007 回答者Y [鼻のように伸びたっていう:]  
008 アナウンサー あ:  
009 回答者Y 意味なんです  
010 アナウンサー ええ  
011 回答者Y 今いったようにそれは下唇の髭の  
012 アナウンサー ええ  
013 回答者Y 一部が伸びたものなんで:  
014 アナウンサー ° あ ( )°  
015 回答者Y あの あくまで: このビジョウっていうのは人間が感覚的に あ 鼻み  
016 たいだ:  
017 アナウンサー あはは  
018 回答者 って言って  
019 アナウンサー ええ

- 020 回答者Y ま 俗称なんですね  
021 アナウンサー ° あ°  
022 回答者Y はい  
023 アナウンサー 漢字で書くと は はなじょう と書く  
024 回答者Y そうなんです  
025 アナウンサー >° び あ はい° < あ わかりました  
026 回答者Y はい  
027 アナウンサー はい (.) では次の質問です

それでは、断片を見ていく。先ほどの第 2 項で、すでに相談者 A による相談内容は解答が与えられ、会話が終了されたと読み取り可能であった。私がここで注目したいのは、なぜ相談者 A による相談が終わったにもかかわらず、アナウンサーは引き続き「ビジョウ突起」について言及するような発言をしているのだろうか、ということである。

進行役であるアナウンサーにとって、その適切な行動とは番組を円滑に進めていくことだといえる。この夏休み「子ども科学電話相談」というラジオ番組において、相談する権利を持つのは相談者であり、進行役にはない。その点で、すでに終わった内容について発言することは奇異に思える。ではこの質問をすることで、アナウンサーはいったい何を志向していたのか。具体的に、データを見ながらそれらを検討していきたい。

まず、003 行目で「びじょうと」言いかけ、相談者の終了交換と重なってその発言を一度止めている。続く 004 行目で再び「ビジョウっていうのは」と切り出し、それに回答者 Y が「要するに」と言う発言で答えている。それに対して、アナウンサーは回答者 Y に続く行で「は は はなじょう ってことですか」と回答者 Y の発言を引き継ぐような形で、問いかけている。

この発言は、別にアナウンサーが「ビジョウ突起」というものの正体がわからずになされた質問であるとは言い難い。なぜなら、先ほど断片 1 で扱ったように、「ビジョウ突起」が変化した例として「テングチョウ」が挙げられ、このチョウの「テング」とは、発達した「ビジョウ突起」が「天狗」の鼻に間違われたために名づけられたのだと回答者 Y が発言している。そこから、すでに「ビジョウ突起」が「鼻状突起」であるということが、聞いているアナウンサーに推測されたのではないかと思われる。

もちろん、それだけではただの推測にしかすぎず、実際にアナウンサーが「ビジョウ突起」が「鼻状突起」であるかどうかを理解しているかどうかは分からない。しかし先の発言から、彼が「ビジョウ突起」が何であるのかを、理解しているような振る舞いが読み取れるのである。なぜそう読み取れるのか。具体的にデータを見ながら詳細に分析していく。

まず 006 行目でアナウンサーは、先の行で回答者 Y により発言された「要するに」という語を引き継ぐように、「は は はなじょう ってことですか」と述べている。この「はなじょう」の前に繰り返される「は は」という語は、次に発言する言葉探しと推測され

る。では「は は」の次に発言されているのは何なのか。それは「はなじょう」である。しかし、なぜ「はなじょう」と言い表すために、アナウンサーは言葉探しをしたのか。

その答えは明確である。つまり、このアナウンサーの頭の中には、「ビジョウ＝鼻状」という構図がすでにあり、その「鼻状」という字を他者に分かりやすく表現するためにはどんな語が適当か、それを探すために、「は は」と言葉探しをしていたのである。もちろん、その言葉が実際にそのような意図を持ってなされた、ということはこちらには判断できない。しかし、そのように理解できる振る舞いとして、読み取ることは可能である。なぜなら、理解とは、その理解したことをそのまま示すだけでは不十分である。例えば会話で相手の言った内容をそのまま繰り返せば、それは相手に理解していないと取られかねない。理解を示すのであれば、相手の言ったことに対して「笑い」や演技といった何らかの応用を利かせることがふさわしいのである。その意味で、このアナウンサーが「はなじょう」と表現したことは、「ビジョウ」の応用であり、彼が「テングチョウ」の例から十分に理解したという振る舞いであると読み取れるのである。

### 3-4. 回答者Yの助け舟と勘違い

さて、再びアナウンサーがなぜ相談が終了した後で「ビジョウ突起」の話を持ち出したのかについて、再び論じていきたい。007行目を見れば分かるように、アナウンサーの「はなじょう ってことですか」に被さるように、回答者Yは「鼻のように伸びたっていう」と述べている。通常このようなことは、会話する上では形式的に不適當である。私たちは相手が話しているのならその発言が終わるまで口を開かないようにするだろうし、もし同時に発話したとしても、相手の発言が先であるのならすぐに黙るだろう。もちろんそうでない時もある。例えば、あえて相手の発言を遮ることで自らの怒りを表現したりもする。ではこの場合、なぜ彼はこのようにあえて被さって発言したのか。

もう一度先の文を思い出していただきたい。ここでアナウンサーが話題にしているのは「ビジョウ突起」であり、それに関して、006行目で「は は」と言葉探しをしている。ここで「ビジョウ突起」について専門家であるのは回答者Yであり、その意味で発言しているアナウンサーは素人である。そうであるからには、この007行目の回答者Yの発言は、「は は」と言葉探しをしているアナウンサーへの助け舟として言われたものと推測できる。なぜなら005行目の発言も、その前のアナウンサーの発言（004: ビジョウっていうのは）を遮る様であるし、007行目では先の言葉探しの「は」を受けて、「は」で始まり「ビジョウ突起」に結びつく語を推測し、「鼻のように伸びたっていう」と発言したのではないかと考えられるからだ。

またさらに、この場において彼は{専門家、素人}というカテゴリー集合で振る舞っている。専門家は素人に対して説明する義務や知識を持ったものとして振る舞う権利を持っている。この意味で、回答者Yが素人であるアナウンサーを遮るように発言していることはある意味妥当な行為であるとも推測される。その証拠に、007行目で回答者Yが発言した

あと、「ええ」という承諾の返答を返している。これはアナウンサーが回答者Yの行為を「不適切」な行為であるとみなしていない証拠ともなる。その意味で、この回答者Yの行為は、アナウンサーの発言を先読みしたものであると同時に、助け舟として読み取ることができるのだ。

しかしこの行為はまた、同時にお節介としても読み取ることができる。なぜそう思うのか、続きを見ていきたい。011行目から022行目にかけて、回答者Yは再び「ビジョウ突起」について一から説明している。しかし回答者Yが「今いったとおり」と断りを入れているように、これらの発言は耳新しいことではない。すでに公共に埋め込まれた知識である。それゆえ、「ビジョウ突起」が「下唇」の「髭」の一部が伸びたものであり、「人間が感覚的に あ 鼻みたい」であるという発言において、アナウンサーはそのことに相槌は打つものの、その声は小さい。

回答者が説明を始める011行目から説明を終える022行目までにかけて、アナウンサーが比較的通常の音量を出すのは017行目の「あはは」と019行目の「ええ」のみである。そのため、これは次の話の促しである相槌であると判断される。アナウンサーが017行目で笑いを浮かべたのは、015-016行目の回答者Yの「あ 鼻みたいだ」という演技に対しての笑いであり、続く019行目の「ええ」は020行目の「と言って」という回答者Yのとりわけ強調した言い方に対する促し、つまり、この「言って」という語の後にこの回答者Yの語る一連の話題のオチが来ることを予測し、それに対してはっきりとした声の音量で促しをしているわけである。

注目したいのは023行目のアナウンサーの発言である。ここで彼は「漢字で書くと は はなじょう と書く」と述べているが、これはまさに006行目の「はなじょう ってことですか」の言い直しとして読み取ることができる。しかし、007-020行目の間で回答者Yから「ビジョウ突起」について説明が与えられたにもかかわらず、なぜアナウンサーは再びこのように言い直しをしているのだろうか。これが意味すること、それはここでアナウンサーの求める回答は、回答者Yより与えられる「ビジョウ突起」についての説明ではなかったということである。

そもそも、アナウンサーが「テングチョウ」の例、および「はなじょう」という応用した発言から、すでに「ビジョウ突起」が「鼻状突起」であると理解していたと推測できる。しかし相談者Aとの会話が終了したあとで、アナウンサーが回答者Yに「ビジョウ突起」について何か発言をしようとしたために、回答者Yはそれが専門家である自分への「ビジョウ突起」の説明の要請だと推測し、発言をしたのではないかと考えられる。

しかしこの判断は勘違いである。なぜなら、アナウンサーは回答者Yの発言が終了した時点で再度同じ質問を繰り返しているからである。つまり、006行目の問いは、回答者Yの007-020行目の説明からは解決されなかったのである。ではなぜ、このようなすれ違いが生じたのだろうか。そしてアナウンサーは、いったいどのような答えを求めていたのだろうか。

### 3-5. カテゴリーが生み出すずれ違いと公共性

アナウンサーにとって、005-009 の回答者Yの発言が助け舟となり、また同時に続く011-020 行目の発言がアナウンサーの求める答えとならなかったのだろうか。

そこには、双方が意識するカテゴリーの違いが潜んでいる。011 行目で回答者Yは「専門家」として発言をしている訳であるが（「今いったようにそれは下唇の髭の」）、上記にある第4項の助け舟の分析でもふれたように、回答者Yはアナウンサーを「素人」として扱っている。しかし回答者Yが011行目で「今いったように」と断っているとおり、「ビジョウ突起」における説明は既になされており、「はなじょう」と言ったことから、アナウンサーがそれを理解していたということも、推測できる。つまり、アナウンサーこの時点ですでに「ビジョウ突起」について「知る者」であった。ではなぜ、アナウンサーはすでに知っている知識について尋ねるような発言をしたのか。

この疑問は実のところ、本稿で私が最も重要としている疑問に深く結び付いている。つまり、アナウンサーが相談者Aによる相談が終了した後に、「ビジョウ突起」について言及したこと、それはとりもなおさず、このラジオを聴くリスナー、つまりオーバーヒアラーを意識してその発言をしたからではないだろうか。

ここで、西阪仰が「箱庭療法」を事例として扱った相互行為空間について取り上げたい。西阪は「箱庭療法」を作る場面を通して、その場に参加する、それぞれの参加者の立場の違いについて述べた後、こうまとめている。

私たちが生きる空間は、その空間（における活動）に参加するしかた、もしくは参与のあり方の布置としての参与フレームとして構造化されている……。一方、参与アイデンティティのそのつどの集合である参与フレームは、規範的に構造化されている。参与アイデンティティおよびその配分にまつわる**権利と義務**の全体布置が、参与フレームにほかならない……。(西阪, 2001:57) (強調は西阪)

つまり、私たちの生きる空間には、それぞれ人びとの活動が存在し、その活動に参加するにはそれにふさわしい配置やタイミングというものが存在する。いくら会話を聞いていたからと言って、かなり距離のある位置から見知らぬ他人の会話にいきなり参加すれば、かなりの違和感を伴うだろうし、逆に自分の話題が出され話しかけられている場面でそれを無視すれば、これまたかなり不自然であろう。このように、会話には視線や配置、や話している内容などでそれぞれ参加する権利と義務が付随してくるのである。

先ほども扱ったとおり、「進行役」であるアナウンサーに、相談する権利はないし、「ビジョウ突起」について説明する権利もない。しかし、この番組はラジオという公共の電波を通してなされている。当然のことであるが、そこには、このラジオを聞いている、その場に参加していないが存在する聴衆、つまり、オーバーヒアラーの存在が前提とされているのである。つまり、この番組がオーバーヒアラーを対象としている以上、彼らに分かる

ように番組を構成していく義務がるし、逆にオーバーヒアラーは理解して聞く権利がある。その意味で、番組を滞りなく進めていく振る舞いを持つカテゴリーが「進行役」なのである。

それを踏まえたうえで、もう一度 006 行目、023 行目のアナウンサーの発言を見ていきたい。ここでアナウンサーは二度にわたって「はなじょう」と問いかけている。つまり、ここでアナウンサーが問いをしているのは「ビジョウ」が「はなじょう」と書く、つまり表記である。アナウンサーは回答者にここで「ビジョウ」の表記を尋ねているにもかかわらず、それに関する直接的な回答は得ることができなかった。そのために、彼は再度「漢字で書くと は はなじょう と書く」という問いをし直したのである。

このことが、オーバーヒアラーを志向した、行動として読み取ることは可能である。つまり、先ほどの回答者Yとアナウンサーの会話のすれちがいと読み取られる箇所の要因は、単に「専門家」として振る舞う回答者Yと「進行役」として振る舞うアナウンサーの志向性の違いと推測されるのだ。

専門家として、回答者Yの発言は正当なものである。しかし、「進行役」であるアナウンサーにとって、より正確な表現をオーバーヒアラーに伝えるために、表記を明示することは大変重要なことである。しかし、005 行目から 022 行目までの発言では「ビジョウ突起」についての説明や、それが「俗称」であるという新たな知識は与えられたものの、「表記」についての発言をしなかった。そのために、ここである種すれ違いが生じているのである。そしてそれは、すでに述べたようにお互いが振舞うカテゴリーの違いによって、生み出されたものに他ならず、ここでアナウンサーがこのように「表記」にこだわる姿勢が、ここで一つこの番組の「ラジオらしさ」を表しているのである。

またさらに、この双方が振舞うカテゴリーの違いが生み出した、公共性が現れている箇所がもう一つ存在する。

断片 3 の 011-022 行目の間、アナウンサーは回答者Yが話している間そのことを訂正していない。通常、自分がした質問に対して、意図と違った答えが帰ってくれば、相手にその間違いを指摘し、修復して適切な答えを得ようとするだろう<sup>9</sup>。しかしアナウンサーはそれを行わない。彼はここでただ「ええ」と肯定の意味を示す相槌で先を促し、相手の演技に対しての理解を笑いで示すだけである。そうして 022 行目で回答者Yが一つの話題の終了を意味する発言をした後で、ようやく修復をする。なぜなら、回答者Yが話題を修復しないうちに修復を促すことは、非優先的<sup>10</sup>な行為であると社会的にみなされているからである。そのため、アナウンサーは回答者Yに自己修復の機会を最後まで与えた後、ようやく他者修復を行うわけである。

しかし、それも回答者の発言に対して、あえて相手の発言のどこが間違いであったかを強調するような言い方はしない。つまり、自己修復を求めるような言い方をしていないのである。もともとそこにはミスなどなかったかのように、あくまでも回答者Yの発言を受けて、「漢字で書くと は はなじょう と書く」と、回答者Yの発言につながりをつけて

発言をしている。そしてそれによって、回答者Yは専門家としての面子が維持され、またアナウンサーは専門性に適った回答が得られたと考えられるのである。

このような言い方をすることは、ただ回答者Yの面子を保つだけでない。ここで回答者Yの面子を保つことは、番組の面子を保つ意味でもあるのである。ここであからさまに回答者Yの反応の形式的な不適を指摘することは、相手が間違えたということ指摘することに繋がる。つまり、回答者Yの信頼性に関わってくるのだ。そのような信頼性のかけた相手の発言に、どれほど重きが置かれるだろうか。ここで回答者Yの面子を保つことは、番組が、回答者Yの発言の信頼性を維持するために適った行動であり、また同時にここがそのような間違いを指摘する場でもないという、アナウンサーの2重の意味での「公共性」が表現されているのである。

#### 4. まとめ

本稿の関心は、メディアにいかにかオーバーヒアラーを志向した振る舞いが表れているのか、ということであった。そしてそのため、今回は「生放送」であり、またオーバーヒアラーであるリスナーがメディアにおける参加者となる点で、大いに面白い分析が出来ると期待した「夏休み子ども科学電話相談」を調査対象とした。その結果がどうであったかどうか、ということはすでに見てきたとおりだ。

この「夏休み子ども科学電話相談」において、ラジオ番組参加者たちがいかに複数のカテゴリーを場面ごとに使い分けているのかが読み取れた。それも、ただ使い分けるのではない。例えば、相談者Aとの会話終了の場面において、「進行役」として場を円滑に進行させるための回答者、およびアナウンサーの振舞いや、「ビジョウ突起」という語をめぐり、「進行役」という立場から「表記」の説明を求めるアナウンサーと、「専門化」という立場から「説明」をする回答者Yとのすれ違いがみられた。

そのような例から、「夏休み子供科学電話相談」というラジオ番組において、それぞれのカテゴリーが場面に応じて使い分けられていることが読み取れた。そこには、時にすれ違いはあるものの、番組の構成にふさわしい振舞いをするのですれ違いもなかったことにされ、相手の面子だけではなく、番組の面子も保つことができた。

それらは得てして、その番組において振舞うにふさわしい行動を意識してのものであり、まさにカテゴリーの有する規範がその振舞いを可能にしていたのである。このように、「夏休み子ども科学電話相談」とは、ラジオの電波から流されているからラジオなのではない。番組の参加者たちが、巧みにカテゴリーを使い分け、それぞれの属する地位に基づいて適切な行動をしようとする中で、達成されているのである。

今回はその典型例として、番組の「進行役」がいかにそれを達成しているのか、という点だけを見てきたが、もちろん、それは他の場面参加者達にも当てはまるだろうと、ここで断っておく。



そのような意味で、まさにメディアというものは、「オーバーヒアラーを志向した対面的相互行為」という場として、参与者達の共同作業によって達成されていると見ることができるのだ。

---

<sup>1</sup> オーバーヒアラー：「Goffman (1976) や Clark and Carlson (1982) は、会話の参与者を、会話に参加していることが他の成員によって知られている、承認された参与者 (ratified participant) と立ち聞き者 (overhearer) に分け、前者をさらに、話し手 (speaker) ・受け手 (addressee) ・傍参与者 (side-participant) に分けている」 (榎本・伝, 2003:25)

<sup>2</sup> 会話終了のやりとり：会話の終了については、第3節2項で扱う。

<sup>3</sup> カテゴリー：もしある人が勉強を強制される時に、「学生だから勉強をすべきだ」というような言い方ならば、多くの者が納得するだろう。つまり、「学生」が「勉強すべき」という規範が成り立つのは、その者が「学生」という地位だからこそなりたつものであり、この例から言えるように、「説明を行なう人は、説明の対象となる人をなんらかの地位によって特徴づけている」 (小宮, 2007:102) のである。これを、サックスは「カテゴリー化」と呼んだ。またこのような地位のカテゴリー化は、「性別」や「年齢」など一人の人に複数あてはまるため、ある人の行為を説明するときは、「その行為者が今何者として行為しているという、行為者の帯びている意味にある」 (小宮, 2007:104) (強調は小宮) のである。

<sup>4</sup> 順番取得装置：「(1) 単一の会話においては、少なくとも一人の、かつ一人の話してだけが一時に話すこと、および (2) 話し手の交替が繰り返されること」が特徴として挙げられ、「会話を交わしているものどうしは、会話をしながら話し手の順番を継続的に秩序付ける「装置」を用いて、この特徴をそれぞれ、あるいは、むしろ、二つの特徴を同時に確保する」 (シュエグロフ・サックス, 1974=1989:181)

<sup>5</sup> 移行適切性：『次の話し手』の選択を組織する一組の手続きと、他方で、どのようなきっかけで次の話し手への移行が起きるのか」が決まるのは、「現在行われているそれぞれの発話の内部においてであり、また、このような選択が効果を得て、次の話し手への移行が適切になされるのは、まさに現在行われているそれぞれの発話が完了しうる場所においてなのである。これを、発話が完了しうる場所での「移行適切性」 (transition relevance) 』と呼ぶことにする」 (シュエグロフ・サックス, 1974=1989:181)

<sup>6</sup> 隣接対偶：シュエグロフとサックスは、隣接対偶の特徴として以下のものをあげている。

(1) 二つの会話からなり、(2) この構成成分として二つの発話は隣接した位置に置かれ、(3) 各々の発話をそれぞれ別々の話し手が生成する……。 (シュエグロフ・サックス, 1974=1989:185)

また、隣接対偶には類型化が存在し、そのような発話類型のうち初めに発言されるものを「第一対偶成分」 (first pair part) 、それに対してされる発言を「第二対偶成分」 (second pair part) として、分割している。さらに、「第一対偶成分」と「第二対偶成分」を密接に関連付けることにより、それは一つの「対偶類型」 (pair type) と呼ばれるものを形成する。そのさい、隣接対偶はさらに以下の特徴をそなえることとなる。

(4) 各対偶成分に相対的な順序が存在し (すなわち、第一対偶成分が第二対偶成分に先行する)、(5) ある対偶成分はもう一つの成分を特定化する関係にある (すなわち、ある第一対偶成分を構成要素としている対偶様式は、どのような第二対偶成分を選択したらよいかに影響を与える) ……。 (シュエグロフ・サックス, 1974=1989:186)

<sup>7</sup> 先終了句：会話を終了するための開始として、用いられる句である。「(降下音調曲線をと

もなった)「うん……」・「わかった……」・「そうだね……」などのいずれかの形態をとるもので、この発言をすることにより「もはやこれ以上もしくは新たに話す事柄が何も無いことを示す」ものである。しかし、またそれは同時に、次の話し手に「話題の一貫性をおかすことなく、新たな話題、たとえば、以前に言いたかったが言えなかったことを導入する機会を」与えるものでもあるために、「先終了句となる可能性のある句」にしか過ぎない。(シェグロフ・サックス, 1974=1989:198)

<sup>8</sup> 発話順番のパス：発話順番が自分にまわってきた時に、もう話すべきトピックがないことを示すために、「は:い」などの前終結 (pre-closing) のことばを使って順番をパスする (山田, 1999:21)

<sup>9</sup> 会話のトラブル：会話のトラブルにおいて、修復をするための特別な実践がある。トラブルの修復とは必ずしも「間違いの訂正」とは限らず、あからさまに間違った表現がされても、その内容が伝わるのであれば訂正されずにそのまま会話が進むこともある。トラブルの修復とは、「その会話のなかでは修復されるべきものであるという意味を示す」(小宮, 2007:141) し、「私たちはどこから修復が始まって、どこでそれが終わるのがわかるように修復を行なう」(小宮, 2007:141) (強調は小宮)。そしてそこには、「修復の開始」と「修復の操作」という別々の作業が存在する。この「修復の開始」と「修復の操作」を誰が行なうかが、ここで一つの論点となってくる。これについて、小宮はそれらの作業を誰が行なうのかを「トラブルの源を含む発言をした人」「その発言をした人以外の人 (他人)」(小宮, 2007:142) の2つにわけ、以下の4パターンを定義している。

(1) トラブルの源を含む発言をした人自身が修復を開始し、自分で修復の操作を行なう

(2) トラブルの源を含む発言をした人自身が修復を開始し、他人が修正の操作を行なう

(3) 他人が修復を開始し、トラブルの源を含む発言をした人自身が修復の操作を行なう

(4) 他人が修復を開始し、他人が修復の操作を行なう」(小宮, 2007:143)

つまり、(1)であれば「えっとこの前ニュースに出てた……あの人だれだっけ。あ、鈴木さんだ」といったものであり、(2)であれば「えっとこの前ニュースに出てた……あの人だれだっけ」「鈴木さんだよ」というやりとりである。また(3)であれば「この前ニュースに出てた佐藤さんってさ」「佐藤さん?」「あ、鈴木さんだ」、(4)では「この前ニュースに出てた佐藤さんってさ」「佐藤さん? 鈴木さんでしょ」「あ、そうそう」といったやりとりが、ほんの一例として挙げられる。このような修復はどのようになされてもよい、というわけではなく、「修復のなされ方のさまざまな可能性のうち、どれを優先的に行なうかということに気をつけながら修復はなされる」(小宮, 2007:145) (強調は小宮)。修復においては、トラブルの源を含む発言をした者自身が「自己修復」を行なうことが優先される。また、他人が修正を開始するのは、相手の発言が明確に終了したときであり、相手の発言順番中に割り込んだり、相手の順番が終わってもよい場所で即座に修復を開始したりはしない。「トラブルの源を含む発言をした人自身が修復を開始する機会をまず与えて、そこで修復が開始されなかったときに初めて他人が修復を開始する」(小宮, 2007:146)のである。さらに、このように他者が修復を開始する場合でも、他人は修復を開始するだけで修復の操作はあまり行なわず、自己修復が優先される。

<sup>10</sup> 非優先：例えば「映画に行かない?」といった誘いに同意する際には、すぐさま「行く行く」という言葉が返されるだろうが、断る場合には、しばしば口ごもったりする。このように「同意のときは、誘いに対して応答が近接するのに対して、非同意のときは、応答の前に言いよどみや間合いが入り込む (近接性が破られる) ことがしばしばある」(西坂, 2008:111) と述べ、そのような行為連鎖のことを「優先組織」と呼ぶ。また、そのような優先組織の規範的期待という程度の特徴として、以下の2つを挙げている。

---

・非優先的応答は、近接関係を破る。あるいは、非優先的行為は、遅延される。(西坂,2008:112)

・非優先的行為は、拡張される。(西坂,2008:112)

この拡張されるとは、非同意となる場合には、明確な否定の言葉がなくとも、「言い訳として理解可能なこと」(西坂,2008:112)を語るだけで断りとなることを言い、つまり、一言以上の(拡張された)構成を取ることになるためである。

また、さらに優先組織の特徴として、もう一つ挙げられるものがある。

・形式的に一致しているものは近接する。すなわち、形式的に一致した応答が優先的である。(西坂,2008:115)

この「形式的に一致しているものは近接する」とは、例えば「明日空いてる？」と誘われたが非同意の場合、形式としては「うんん」という語が来るだろう。しかし、「明日空いてる？」という語は、翌日の用事を訪ねる一方で、それだけですでに勧誘も含意されている。この場合、通常答えるなら「うんん、明日はちょっとバイトがあるんだ」というように、拡張された構成で返答されることとなる。決して「明日はバイトがあるんだ。うんん」とは言わないだろう。このように、形式的に尋ねられたことに対する答えが優先的に近接するのである。

## 謝辞

本稿を書くにあたって、多くのご指導、ご助言、ご支援を賜りまして、本当にありがとうございます。いつも根気強く指導して下さった樫田先生。そして温かい助言をいただきましたゼミ・友人の皆様。いつも優しいお言葉とお心遣い下さった宮本さん。

この場を借りまして、厚く御礼申し上げます。

## 参考文献・引用

榎本美香・伝康晴, 2003, 「3人会話における参与役割の交替に関わる非言語的行動の分析」, 『人工知能学会研究会資料』, SIG-SLUD-A301: 25-30.

(<http://mika-enomoto.info/pdf/SIG-SLUD-A301.pdf>, 2009年11月26日)

Emmanuel Schegloff and Harvey Sacks, 1974, “Opening up Closing” in R. Turner (ed.), *Ethnomethodology*, Penguin:223-264. (=1989, 北澤裕・西阪仰訳, 「会話はどのように終了されるのか」, G・サーサス/H・ガーフィンケル/H・サックス/E・シェグロフ, 『日常性の解剖学——知と会話——』, マルジュ社: 175-240.)

Harvey Sacks, 1972, “An Initial Investigation of the Usability of Conversational Data for Doing Sociology”, Sudnow, D. ed., *Studies in Social Interaction*, New York:Free Press, 31-74. (=1989, 北澤裕・西阪仰訳, 「会話データの利用法——会話分析事始め」, G・サーサス/H・ガーフィンケル/H・サックス/E・シェグロフ, 『日常性の解剖学——知と会話——』, マルジュ社: 93-173.)

串田秀也, 1999, 「お助け舟とお節介——会話における参与とカテゴリー化に関する一考察」,

- 
- 好井裕明・山田富秋・西阪仰編,『会話分析への招待』,世界思想社:124-147.
- 小宮友根,2007,「規範的があるとは、どのようなことか」,前田泰樹・水川喜文・岡田光弘編,『ワードマップ エスノメソドロジー——人びとの実践から学ぶ』,新曜社:99-120.
- 中村和生・檜田美雄,2004,「<助言者—相談者>という装置」,『社会学評論』,55(2):80-97.
- 西阪仰,1997,「認識と文化 13 相互行為分析という視点」,金子書房:73-103.
- 西阪仰,1999,「会話分析の練習——相互行為の資源としての言いよどみ」,好井裕明・山田富秋・西阪仰編,『会話分析への招待』,世界思想社:71-100.
- 西阪仰,2001,「現代社会学選書 心と行為——エスノメソドロジーの視点——」,岩波書店
- 西阪仰,2008,「分散する身体——エスノメソドロジー的相互行為分析の展開」,勁草書房
- 前田泰樹,2008,「心の文法—医学実践の社会学—」,新曜社:120-137.
- 山崎敬一編,2004,「実践エスノメソドロジー入門」,有斐閣
- 山田富秋,1999,「会話分析を始めよう」,好井裕明・山田富秋・西阪仰編,『会話分析への招待』,世界思想社:1-35.